

「おもてなし」の花づくりを考える

林 角 郎

1. おもてなしを意識した花づくり

来る2020年のオリンピック、パラリンピックを意識した花壇造成などが各地で考えられてきているようです。これまででしたらイベントに伴う花づくりは該当する地域で、直接会場となる場所の周辺の装飾のみが考えられる程度でしたが、今回はさらに広く考える必要性もあるようです。そもそも政府自身が、これを機会として海外からの観光客の誘致をはかり、ひいては観光産業の発展を意識しているようなので、国内すべての地域を通した大きな取り組みを考える必要性も予想されます。おもてなしの手段については来訪者の地域による違いもあるでしょうが、一般的な考えとしては、まず地域内をきれいにし、目立つ所に花の植栽を行なうような形になると思われます。むしろ今回の場合を契機として市街地の中や生活の周辺に常時花を多く取り入れて、それぞれの地域の特長を示す方向を模索すべきと考えます。

当地・南房総地区は観光地の一つになっており、県内には国際空港もあることから、今後は外国人の来訪も意識し、地域内各所に何らかの形で花が見られ、清潔感ある土地の印象を高める努力がぜひ必要と考えられます。そのため今回はまず、小生が感じた国外における例を示すとともに当地の花づくりの状況の一部を紹介してみます。

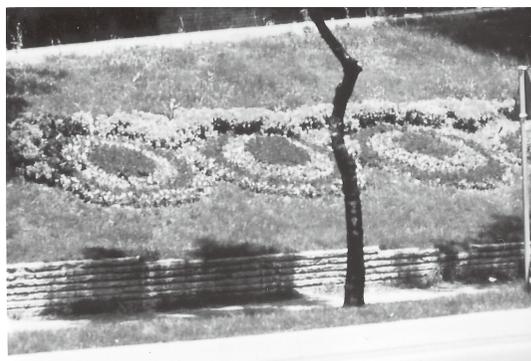
2. ヨーロッパ旅行の思い出から考える

道から見られる花づくりで強く印象を受けた2例について述べてみます。話は古くなりますが、1978年の春に当時の京都大学教授である塚本洋太郎先生の引率により、オランダで行われたフロリアードの見学を主としたヨーロッパの花栽培の視察ツアーに参加しました。当時、第一園芸株式会社のご支援もあって今年1月に亡くなられた岩井英明さんご夫妻で同行し、試験場関係の人も小生を含めて何人か参加し、大変有意

義な旅行でした。その中でオランダのキューケンホフ植物公園を見ての帰り、宿泊地であるアムステルダム郊外にさしかかった頃、道路の片側に小さな1戸建てのいずれも似た形の家が見られ、それがかなり長い間続いていました。目をひいたのは家の入り口周辺に飾られた花の植込みで、種類や配置は家ごとに違っても、いずれも見事に花いっぱい咲き誇っているため一同は車中から見とれていました。ただ、見ているうちにどういふわけか1戸だけ全く花のない家があり、他の家々の見事さと大きな違いがあるため筆者が思わず口に出したところ、すかさず車内から「この家の主人は花の研究所に勤めていて花づくりに飽き飽きしている人かも」という声が出て、一同大笑いになりました。

当時、我が国では現在広く普及しているガーデニングはまだ一般に行われていませんでしたので、フロリアードでの庭の装飾例なども見て回るだけでしたが、その後もなく我が国でもガーデニングがブームとなり、特に家のアプローチを飾る手法がアムステルダム郊外で見た情景そのものであったことに気がつき、改めて旅行の意義が強く感じられました。

もう一つの道ばたの花壇の例として、筆者の友人である花葉会幹事の小泉力さんから提供いただきました、イスタンブール市内の花壇の写真を入れさせていただきます。



①トルコ イスタンブール市内 道路わきの花壇
2012. 6. 28 (小泉力氏提供)

この写真①は2012年夏に行われた花葉会海外園芸事情調査旅行に小泉さんが参加され、帰国後にお願いをして7月下旬に鋸山までおいでいただき、当地の花壇を見ていただいたあと、旅行時の写真をプロジェクターにより、当地の花壇の会員とともに見せていただいたものの一部を今回、拝借したものです。これらの花壇の材料は一般的に見られる夏咲き一年草のようですが、何コマか見せていただいた様子から同市の各所で見られたように思われます。また、芝生中に我が国では全く見られない唐草模様のようなデザインでフレンチマリーゴールドが植えられた情景の写真もあり、中近東のお国柄が思われました。

ともあれ、この花壇の撮影された時期は昨年9月にIOC総会で2020年のオリンピック開催地が決定するほぼ1年前のことで、当時候補に名乗りをあげた各都市が誘致にしのぎを削っていた頃になりますから、そのことと考え合わせると、その意欲が感じられます。同時に本番の行なわれる我が国では花に関心の強い人が多い国から来られる人々の気持ちを考えて、おもてなしの心を示す沿道の花づくりを、より強く進める必要性が感じられます。

3. 安房地域における沿道の花づくりの概況

ここで沿道もしくは、それに準じた場所における花づくりの例として筆者の居住する安房地域内で見聞きする範囲で、その様子を市や町の別で述べたいと思います。

まず館山市では、これまでも述べていますJR館山駅東口の花壇が館山市の管理で作られています。同駅の西口にも芝生中に花壇が作られ、東口とは違う課により独自に管理されています。そして西口では別の場所に市民グループがボランティアで冬は花菜、夏は夏咲き一年草を植栽しています。(写真②)

また、沿道の花としては、同市西岬地区から神戸地区に至る海岸沿いのやや長い県道の両側に細長い植栽地が設けられ、冬期に花菜が作られています。これも市が管理していますが、地元の人々もかなり協力しており、この道路が毎年1月末に行われる若潮マラソンのコースに使われるため、この菜の花は重要な存在になっています。

以上のほか、市の教育委員会生涯学習課では、約30



② JR館山駅西口前のボランティアグループ栽培の菜の花 2014.3.4

年前から毎年春と秋に市で購入した一年草の苗を市内各所に設けた花壇で自主的に栽培するグループに配布しています。2014年には、その数は29カ所になっており、それぞれのグループは工夫を凝らして、別な苗を加えるなどして地域の雰囲気盛り上げに努力しています。(一例写真③) また前号でも述べた道路に面した各家の栽培も盛んで色々な例が見られます。



③ 館山市那古地区における老人会栽培の花壇
パンジーの苗は市から配布 2014.4.26



④ 館山市内個人住宅入口に飾られたプランターの花
2013.8.12

写真④は個人の家ですが、階段を利用して入り口周辺を毎年夏冬を通して花で埋めるように栽培しています。また変わった植物の例としては、市内のメインロードに面した薬屋さんが、ストレプトカーパス・サクソルムの株を栽培して店内各所に置き、全面ガラス張りのため通りからでも青い小さな花の群がって咲く様子が常時見られます。(写真⑤) この植物は夏の高温にも冬の低温にも弱く、日陰地を好むため温度調節された店内の条件が適しているようで、各株は10年越しの大株となって花をたくさんつけていました。前号に述べた道ばた園芸では戸外のみでなく、このような例もあるといえます。



⑤館山市内の通りに面した薬局の室内に咲く
ストレプトカーパス・サクソルム 2013. 9. 13

次に、外房に面して存在する鴨川市では、市内にテレビにもよく紹介される鴨川シーワールドなど観光地も多くあり、宿泊施設も多数あるため、花の植栽については市自体もかなり力を入れています。まず、市の中心部を通る国道の市内から北の亀田病院付近までの道路の両側に、リボン状に植栽地が設けられて、市自体で年間を通し植栽を行なっています。(写真⑥)



⑥鴨川市内道路わきの花壇に咲くペチュニア
(市管理) 2013. 9. 22

さらに、2013年には君津市方面から市内に向かう道を左折し、直接外房に至る道路の脇にも市が植え込み地を作り、この春には各色のパンジーが見事に咲いていました。(写真⑦)



⑦鴨川市内北部で外房に至る道路わきのパンジー
の花壇(市管理) 2014. 4. 16

また、同市では市内の花栽培グループが公共地等で栽培し、咲いた状況を毎年春に審査する花壇コンクールを行ってきて、今年で32年目となり、20点の花壇が審査対象となりました。写真⑧はその中で最優秀賞となった、かなり大きい花壇です。別に市内ではボランティアグループにより、冬の水田地での花菜の大面积栽培が行われており、1～3月の満開時には、この地を訪れる人々の目を楽ませています。



⑧鴨川市花壇コンクールにおける優秀賞の花壇
花はアイスランドポピーが主体 2014. 4. 16

次に、数年前に6町村が合併した南房総市は、かなり地域が広いので、花づくりはやや少ないようですが、それでもJR千倉駅前(写真⑨)では市の助成でボランティアの人々が管理する花壇があります。同南三原駅前では地元高校の生徒が協力し、苗も供給して花壇が栽培されています。



⑨南房総市JR千倉駅前での市民の栽培する花壇
2014. 8. 20

また、沿道としては旧丸山地区に市の公社として道の駅ローズマリー公園があり、その前を通る県道の沿道に植え込み地が作られ、これも地元の人々が協力して、年間を通じて花を切りささず栽培が続けられています。

なお、構内での栽培になりますが、この公園では以前からヨーロッパ風のベルサイユ宮殿のガーデンに似た花壇があり、これまで長く続けて栽培されています。また、南房総市では、内房の富浦地区にある道の駅とみうら枇杷倶楽部で本館建物の南側にやや広い植え込みの場所があり、技術顧問として勤務する本学部農芸化学科卒の白崎隆夫さんが11年前から担当して、構内で育苗した多種の苗を順次植え込んで、年間切りささず花で埋めるよう栽培しています。（写真⑩）



⑩南房総市とみうら枇杷倶楽部内の花壇 2014. 6. 19

最後に、鋸南町は地域も小さいため栽培は多くありませんが、これも本学部園芸学科卒の篠原茂幸さんが30人ほどのボランティアを引率して、町内の道の駅きよなんの構内に 150㎡の花壇を作り、春秋に植え込んで管理しています。別に、勝山地区の県道の脇には、これも地元ボランティアの人たちが長さ

500メートルにわたり、毎年ハツユキソウを栽培し、新聞にも報道されています。このハツユキソウの苗は、特に購入はせず、前年のこぼれ種子から発芽した苗を掘上げ、耕起後に植え付けて種苗代を使わず栽培しています。なお、この鋸南町では特産の日本水仙を土手などの斜面に植えて大量に栽培する地区があり、これは水仙の里として著名な観光地になっています。

4. おもてなしとなる花づくりの普及について

以上、ご紹介しました南房総の安房地域における沿道を主体とした花づくりの状況について、全体を通してみると沿道の植え込み地等の栽培は公共機関で管理されている例もあるものの、実情としてはかなり、それぞれの地区の住民によって管理される場面が多いようで、これが各戸における栽培とともに今後の方向を示すと思われます。この傾向は全国的にも共通していると思われますから、今後は情報を交流しながら、よりよい活動の発展を図るべきだと思います。

この住民の人達による花づくりの活動については基本的にいくつかの問題が存在します。まず一つには、植物の性質や栽培技術等、基本的な知識と技術の普及の問題があります。これについて、情報としては各種メディアから得られるようになってはいますが、実際に植物に対応して行う適切な処置を体得しながら知識を高める必要があり、そのためのリーダーの存在も重要です。次に、花壇に使う材料の選択やその組み合わせとそのデザイン等について対応する栽培方法と共に極力新鮮みを持たせ、独自性を発展させることが望ましいと思われませんが、実際には長く続けるとマンネリ化する傾向が見られ、特長の薄れる場合もあるようです。このために少しでもお役にたつことを願って、地元新聞に毎月1回新しい花づくり講座と題する連載記事を投稿してきており、この9月で55号となりますが、まだ意はつくされません。これらの問題については、次号で述べさせていただきたいと思います。